

とうじ こんげんしゃ

藤治権現社について

京王線高幡不動駅の北口から徒歩3分の場所に、藤治権現と呼ばれる小さな社があります。日野市高幡323番地に位置し、京王線の線路沿いにあるのですが、駅前の道路からは、少し小道を入ったところにあるので、なかなかこのような小祠があることに、気付かない方も多いことでしょう。



修復された社殿

江戸時代から、もう200年近くにわたって地元の人々によって大切に守られてきた社ですが、昨年（平成25年）秋に社殿の修復が行われました。また、『藤尾社藤治権現社社殿修復記念誌』（私家版）がまとめられましたので、その由来などを紹介したいと思います。

〈藤治権現社由来〉

藤治権現社の由来については様々な言い伝えがありますが、その概要をまとめると以下ようになります。

江戸時代の寛政年間（1789—1801）、高幡村（日野市高幡）に生まれた平藤治は、名主の一族でしたが、村の若者たちのリーダー的な存在で、飢饉に苦しむ村民のために、年貢の減免などを訴える、正義感にあふれる青年だったようです。ところが、そのような藤治の存在を快く思わない名主をはじめとする村の指導者層の人々の謀略により、無実の罪を着せられ、江戸伝馬町の牢獄に捕えられたということです。文政元年（1818）11月のことでした。やがて、取調べの結果無実であることが判明したため藤治は釈放され、村へ返されることとなりました。藤治に無実の罪を着せた村の人々は、力も強く元気の良い若者だった藤治の報復を恐れ、明日は村へ返されるという日の前日、文政2年4月17日、秘かに牢の獄吏に依頼して藤治を謀殺したということです。村人からの差し入れだと騙して毒饅頭を食べさせたとも伝えられています。

こうして事件は一件落ち着いたかに思われましたが、その後村には飢饉や悪病の流行など良くないことが続き、誰言うともなく、謀殺した藤治の霊の祟りではないかと怖れられるようになりました。そして、文政～天保年間（1818—1844）に、現在地に小祠を建立し、藤治権現社として祭祀を続けています。この場所は、藤治の住まいがあった場所だ

とも言われています。

祭礼は、現在至るまで藤治の命日にあたる4月17日におこなわれています。社殿の管
理や祭礼の運営は、高幡地域の鎮守である若宮神社の氏子会が主体となっていて行われており、高幡不動尊金剛寺の僧侶が挙行します。また、このとき必ず饅頭（高幡饅頭）と豆腐が供えられ、参列者に振舞う慣習となっています。

平藤治の一件について江戸時代に記録されたものは発見されておらず、伝承は口頭で伝えられて来たものと考えられます。昭和26年に社殿の修復をおこなった、高幡出身の
下田國平が述べた「藤尾社藤治権現の本尊平藤治の一代記」が記録されており、参考文献
にあげた文献類も、これに基づいて書かれているようです。残念ながら、日野市郷土資料
館では、未だこの記録を入手することが出来ていません。

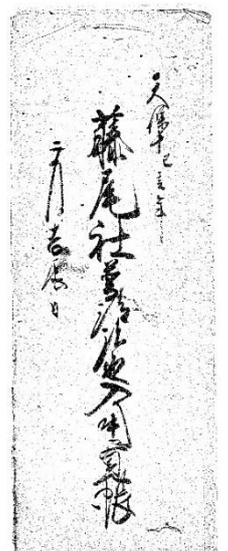
村人のために戦って命を落とした人を義民といい、講談や芝居にもなっている佐倉惣五郎が有名ですが、藤治の伝説も日野に伝わる義民伝承のひとつといえるでしょう。

〈藤治権現に関する資料〉

高幡村には、享和2年（1802）・文化元年（1804）・文化11年（1814）の三冊の宗門人別帳が存在し（日野市郷土資料館所蔵平家文書）、藤治の父八右衛門を当主とする藤治一家の記載があります。これによれば、藤治の生年は寛政2年（1790）、亡くなった時には29歳だったということになります。生年を寛政6年とする言い伝えもありますが、人別帳に藤治（藤治郎）の記載があることから、彼が実在した人物であることは確実でしょう。

藤治権現社に関連する資料としては、天保10年（1839）『藤尾社普請諸色入用覚帳』（右図 日野市郷土資料館所蔵平家文書）が、殆ど唯一のもので、高幡村の名主を務めた平家に伝来していたものです。藤治権現社を「藤尾社」と称することの由来についてはよくわかりませんが、その当時、公然と「藤治」の名をつけることは、はばかれることだったのかもしれない。『土地台帳』の登録も「藤尾霊社」でなされています。

社殿の創建については、天保5年とするもの、同8年とするものなどがあり、天保10年の社殿の普請が、創建の記録なのか、再建・修復などの記録であるのかは詳らかではありません。ただ、この帳面にある用材や獅子頭などの記録は、現在の本殿のことと考えてよさそうです。また、祭礼の子どもへの振舞いとして「饅頭代六百文」の記載があり、この当時から非業の死を遂げた藤治への供養として「饅頭」が振舞われてきたことが分かり、興味深いです。また、もう一つの供え物である豆腐と関係するかどうかはわかりませんが、「豆腐二丁」の記載もあります。なお、明治28年（1895）下田レンによって創業された「元祖高幡饅頭」（栄昌堂・太平洋戦争時に廃業、日野市史別巻『市史余話』



参照)は、藤治権現の祭礼で配られた饅頭を起源としていると伝えられています。

今回の社殿の修復時に、本殿に納められていた題目曼茶羅^{だいもくまんだら}の奉納札(219×96 mm)が発見されました。これは、弘化3年(1846)4月に洛西の宣澄という日蓮宗の僧侶によって納められたものですが、詳細は不明です。

なお、藤治が籠に乗せられ江戸の牢に連れて行かれる時、三沢橋(程久保川に架かる村境の橋)のたもとで、下田・森久保姓の二人の老婆が藤治の乱れた髪を整えてやったところ、藤治は大変喜んだという伝承が伝えられています。二人の老婆の子孫には、藤治の霊の災いは及ばないのだということです。(平成26年7月15日 日野市郷土資料館 北村澄江)

(参考)『日野市史民俗編』(昭和50年)

田中紀子採録「藤治権現由来」(『日野の歴史と文化』18号 昭和58年)

森久保憲治『高幡風土記』(平成22年)

『藤尾社・藤治権現社殿修復記念誌』(平成26年4月 編集・発行朝倉海玄)

(上記の参考文献や本文中の資料などは、本誌に再録されています)

問合せ：日野市郷土資料館(印刷したものを配布しています)

(TEL 042 - 592 - 0981 e-mail museum@city.hino.tokyo.jp)

*『広報ひの』7月1日号「みんなの日野こぼればなし」に「藤治とまんじゅう～藤治権現」を掲載しています。



修復された本殿。奉納札が納められている。